



へ13  
3141  
4

茶磯棠

扱前程より外の方より立ち上る歌占の女を花壇の方より  
 へつけ今宵一笛の音を尋常きく女のをける足  
 笛少秋の鹿のやぐばよるとは夫を鹿笛これも養人の吹とさむ笛の  
 音いろのいかりさよとちひひとりごちてぞ居より多かるか歌よりしも  
 餘吾郎が奴僕汗もあて又息もつぎあてに庭であひまよそかりく  
 ありをんを歌占乃女を庭木の志かりより裏まうをれ入ぬかの僕い庭  
 上より跳き餘吾郎はむひていろく伊勢宿は大妻事出まゆはる  
 おん運よまわりゆとしくおん飯里のへりては餘吾郎のいざ  
 そいっつる愛みぞとらぬまふ僕いこ此をそなまじりごらるる  
 いざさうくと急がれぬぞ餘吾郎は不心うたのそらうくた  
 して僕と共に飯をわしえ吾妻が何やと胸をいさひれ



物案ト吐息して居り。彼歌占の女ハ木蔭を穿く又柴折戸乃  
 りと立寄声。やうまのひくろ夫歌ハ天地のけけ始より陰陽乃  
 二神天のちまこはれたあひの小夜の手枕むむびまざり。世々  
 今よまゝ。如道なり。夫婦の相生縁むむ待人の来る来が伊勢  
 の濱萩名をくそて浪花のゆのよーわいも。さーく判トてまねら  
 占とるや。歌占とるや。やとひんたれと。吾妻ハこれと字。折  
 歌占。爰又入らざり。掌と打りて女童とび。くくせまとのひ  
 つくれを。くへの声も長露地の飛石づひは彼方よめた。かの女と  
 吾妻ハ向合歌占とひまき。は。安き心得を。一番  
 手は何より。短冊の歌を讀み。さーく考てまねら。短冊と  
 しんは。引とさーく。吾妻も心は神を念ト。さーくのおとく

短冊をとりあひしれを

学乃ハこのうらの時鳥もや。父は倣てまねら。父に倣  
 と。歌なる。女まどくを考ていん。おんを幼くて実の父と  
 養父又育らまぬ。は。吾妻いん。誠はくあひぬ。猶  
 くりを判トて。さーく。女又いん。鴛の子ハ子なり。時鳥の鳴  
 音かれ。死宿疎とて。度々難義ハ。べれと。学はありと。ひ  
 字音あり。あうを逢の訓は近く。又来る春の幸は逢と。占  
 あり。さか。い。さ。吾妻と。少。愁と。さ。あ  
 う。若。う。う。く。ひ。ひ。彼女。吾妻。あ  
 う。あ。さ。さ。目と。卒。さ。さ。あ  
 う。う。う。う。う。吾妻

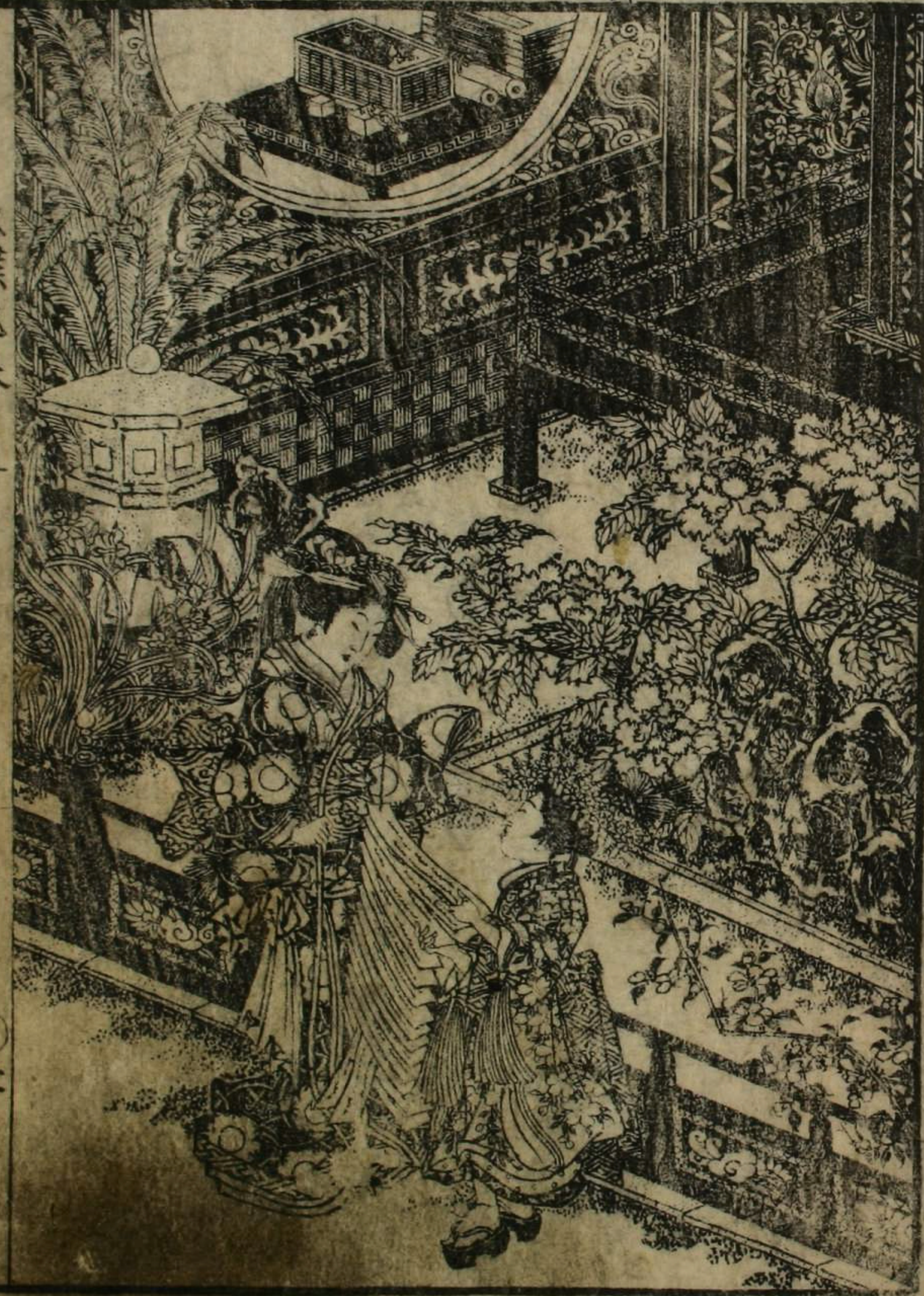
夫也。いふ一てこれを見知りあふやとつらうふ女づく。我のぞも  
 是と見たふき。おん身を伊勢の國の樂人二見太夫。是次より  
 人の娘もどし。わづろ我のちん身の姉も其證を見れば。も懐  
 より笛の管を取つて。そをる濡髪とのみ金字あり。こたう乃  
 笛吹よあ見る。間又髪と不容符を合せる。は箱をいへ。吾妻そ  
 且おまき且。うづる。さへ姉も。かす母。乃乃の  
 うろふ。姉もわると。まに。と妻と。うろふ。年三。つら。ひ  
 兄弟もて。幼と。は。ゆく。より。とれ。少も。おん顔を。おび。く。い  
 今日。ろく。れ。も。此笛が證と。あり。て。ま。だ。逢。く。父。く。の。あ。み。り  
 う。ご。み。か。し。き。り。お。く。愧。き。此。安。と。泣。く。と。は。姉。へ。涙。と。お。い。け。し  
 い。か。く。少。も。耻。べ。き。と。あ。ら。ん。養。父。の。急。難。を。さ。さ。う。と。あ。ら。ん。と。い。し。

つらふ。風の。い。か。く。に。聞。く。と。い。つ。と。所。も。さ。ら。あ。ら。ぬ。か。ら。う。と。ろ  
 おのひ。か。ら。う。尋。ね。べき。便。も。な。ら。ず。ま。だ。な。ら。ば。死。の。母。人。乃。おん。こ。と  
 羔。さ。く。あ。ら。も。や。不。い。と。と。を。養。父。も。母。も。か。り。ひ。か。け。り。今。の。い。し  
 出世。あ。そ。も。ぬ。夫。又。つ。き。て。物。語。る。ま。さ。ゆ。も。あ。ら。ぬ。あ。い。人。目。も  
 端。近。を。れ。ま。つ。て。さ。え。く。さ。う。ひ。て。奥。の。一。間。よ。入。り。時。は。箕。腹  
 銭。右。清。門。沙。土。七。と。い。ふ。僕。を。つ。ま。て。樓。上。を。さ。さ。り。此。所。よ。出。来。て  
 四。辺。と。見。ま。し。し。声。を。ひ。き。り。な。ら。ん。此。も。端。近。を。れ。と。い。は。り。と  
 人。も。え。こ。も。幸。わ。れ。我。汝。が。心。底。と。見。と。け。し。中。密。め。と。語。り。ま。し。め  
 ぞ。う。我。の。こ。こ。で。隠。謀。あ。ら。ん。執。權。職。山。咲。庄。司。は。何。が。お。衆。と。い。は。り。と  
 う。し。お。ん。と。い。ふ。折。節。餘。吾。郎。が。上。京。と。幸。ひ。彼。と。さ。う。の。う。し。と。く  
 此。曲。中。よ。詠。歌。成。増。者。よ。せ。と。や。と。計。ら。ぐ。彼。へ。原。聰。明。て。思。慮。乃

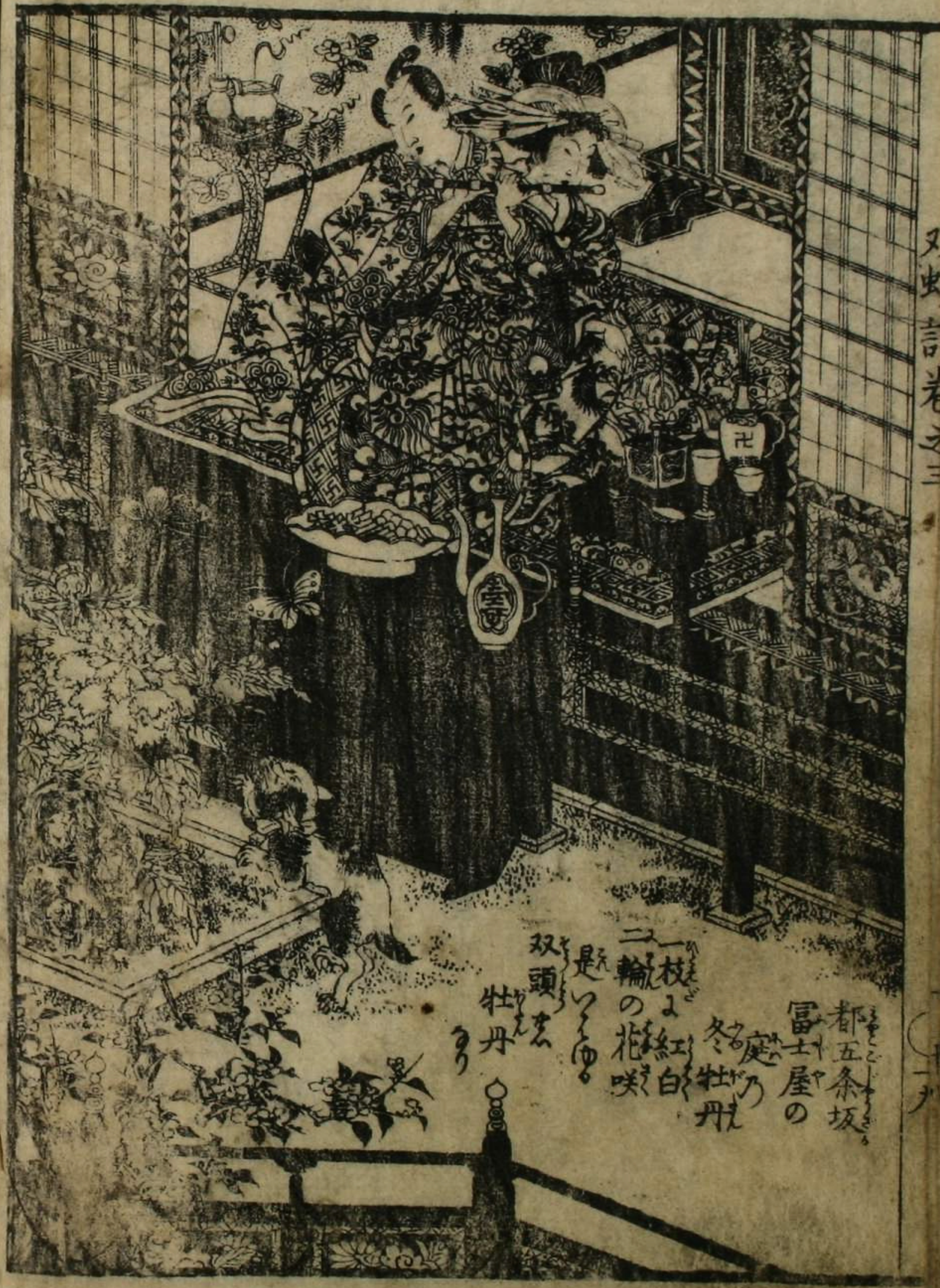
又史記卷之三

敷坐之式一貝音

又世帯巻之三



三下



又世帯巻之三

都五條坂  
富士屋の  
冬庭の  
牡丹  
一枝の紅白  
二輪の花咲  
是つゆ  
双頭  
牡丹

浅くぬ者なれを計りひあうらうとろひの外吾毒が艶色よ未  
心を乱し許多の黄金と費し父の代泰して高野山に引  
金までも残りりらひそせし様子なれを當分強倉に歸るも能  
べうらひこれより我且彼よりされ強倉に飯を彼が在京の中  
放増をくしく主君よきえわけて讒言とりらひあたかりく  
切腹かうくであらう松ひの必定ありあるとた其罪と父庄司より  
およやう多く親子ともよじりよぶくあふなり我宿望をさげなれ汝  
よも禄あま手へてよ死武士よ取立得られしよ森ばーのどや  
主用も己よそのひ今夜が曲中の餘波なれ河曾比どり  
呼来して汝もよふ一盃とて前社よしひたれを沙土七ハ  
小踊してよろこび勝手の方へ走去ぬ蟻右衛門ハこの一

臂枕して寐をり膝の頭を打て拍子をまら月おつつき小金山  
其名のわくまうらうと曲舞の音頭と調り寛々として居し  
折しも装束ある武士庭づみふ来ると是乃梅ヶ谷郡  
領の家臣袴田紺九郎なり蟻右衛門へわくと見るよりいそぐしを  
舟と超して立向氣づりや紺九郎主何等のゆかりて上京せ  
らばしそらば紺九郎の息もつぎあを火急のゆと吉人よめ  
夜と日よつぎて上京し和主の旅宿とよみ結つふ此所よあつと  
宿てふれまを来まら爰の端述を密事と語りまらまら金死  
所よ案内しまらまらとていそぐをれを蟻右衛門ハ益氣づみおく  
ゆりまら小坐敷よ連去てくや様子と聞しまらまら紺九郎  
声よひそめていそぐ和主と我よりみて心と合せ蛇ヶ谷の老女乃

味方みつゝ且月影介谷く梅个谷の両家と亡し其執事まどて  
 塾懐の旗と飄一。南朝の天威と假奉りて北朝とくまけ。平家  
 再兵の時を得て我輩も一國の主とさる。歡樂ときりびべいと  
 企より隠謀の密書と山味庄司と棄りて隠謀あつれ庄司  
 君命とろけ。上京して和主と捕へ鎌倉よりくとも。旅の用意を  
 ともとばこいふとふきと驚く間も。我主人より告るるや。  
 我宿所を捕人とむけらさる。ゆゑ危き所と斬抜辛じて逃  
 のびぬ。和主もろく逃支度し多とくは。棧右邊門を忽面色  
 青草の色も変り心あてり。のふりさる。難し。一旦兩人とくま  
 隠謀露れぬ。一時も當地は足とく。難し。一旦兩人とくま  
 身と隠て時節とろけふれま。再會の所はさる。と耳よりつて

つひけき。紺九郎の打點頭て出たぬ。棧右邊門の沙土とくま  
 有増を詰問せはも。とく身とく。つひて持合せも金と  
 路用もよ。主従もれておりの。よ。出たぬ。○つて時刻をや  
 うりて此日も已に暮ける。烟花のさる。と。昏より。賑  
 たく。二階坐敷奥坐敷間毎く。酒宴と設。或は弾。或は謡。よ  
 われを耳語わ。おのがさ。奥ト。唯青貝の坐敷の。人け  
 ぐ。灯火も。さ。り。り。初夜。比庭。の。秋垣。と。破て  
 去のび入る。白髪の老女。祿。上。その。歩。ゆ。け。圍。も。光る  
 糸の眼とく。廣坐敷の違棚。と。載。あり。吾妻。手箱。と。探  
 わりて。彼笛と。奪取。懐。に。押。入。て。退。き。出。ん。と。折。り。吾妻  
 ころ。手燭。と。り。姉。と。守。て。此。と。り。は。来。り。老。女。と。え。つ。け。く

あやしき手燭の光よふ顔とて。ヤ。そまのいづそや餘吾郎君  
 は雇ひきて来つる婆々さうばや。とくと老女の見むれり。さだめども  
 いとだ去んともる。歌占の女弓とりて押戻は老女をこれをも  
 りかひて又踏ねんと歌占ハ弓と斜に取らしてや。はこころゆ。  
 即坐の粗まぐろく桃あつちめ。時は怪哉老女懐よのじよる  
 笛おのづろ音と発しこれ心吾妻を驚まし。うくこそ曲者其  
 懐こそあやしなれ。といひて手燭をこつて老女を手にさく  
 打落と二人の探る。暗まればとよ。行方もなれどなりにも  
 是乃鎌倉蛇ヶ谷の光女あり。味方と招き軍用金を  
 集るま。諸國の靈場とりぐる旅の女は身と捨し。まぐろく  
 當地は足ととりめ。此夜笛と奪ひもつて又他國よ

赴きたるとて

⑦ 木枯の果ありけり 記念の竹刀

扱も其時餘吾郎の僕のおふ心き。これと乃と急ぎて旅宿  
 へ飯見てげるふ。昨日紀の國より飯道し。南方十宗去。漢  
 腹十文字は掻切て朱は深りて伏居り。餘吾郎はこれとる  
 より。こいそもいふとありて抱き起しと見る。誠に見ゆなる  
 自殺もそ。日息絶。月上の氷の如くは冷。さうりこれ唯わたり  
 て物よふい。良あつてや。心と考め。何ゆゑなく。かりやと  
 ぶら傍辺とれを自筆の書置あり。いとぐろくひさき。なる  
 其文よ。いづく

君僕と當地は残し。かれ先づちて紀州高野山に赴て。僕ハ



沙石塔成就の日と待て後より参べしと命におくはゆに  
留主のうち旅宿のつとぐは偶五条坂の遊君はあつて  
勿幹きくも沙先祖沙追善の爲は沙携あそむに僕  
預めしれは常住金とつみ捨今に至りて先非と悔自殺  
仕ゆやうく残金百五十兩沙座に此金子と石塔料は  
乍彈沙父君へとばをきくをあげさせし僕が死骸沙へ付  
おついで生と世と難は依て存は恐惶頓首

永和元年十月某日

南方十字兵衛

餘吾郎君

とひきくも餘吾郎とれと讀終て頻は涙と落しぬも我放埒  
金子と残らんと捨する事と知り我罪とおのれが身は

切腹しつらくも馬鹿者不忠者といふは我とて  
て死する忠志とてつとまきりのさふは戦場の打死も後代は養名と  
残まるといふも余もつとまきり汚名といふは忠死で者古今  
稀なり不忠者とて死する心底をもうるは勝もらざる  
ころをきり今果るはあつたは前程富士屋の庭の胡蝶のありさぬ  
不祥な歌占の歌

北を黄は南へ青く東白西れかぬそららの山  
とひて南方へ青きれとて此とて考まを浅黄色の蝶猫  
唯冬の蝶のつとじとのとらぬは九盧の拙き所なり彼とらぬ是を  
かりぬ我傾圜の色は迷ひ祖父追福の金と失ふの事は

忠臣と殺せしめ。不孝しひ不仁しひ。我月の罪の重きゆへに。知べし。後悔せしめ。今後悔せしめ。更しひ。今後悔せしめ。散り取つて。悲歎の涙をひらき。生る人よ。あつた如く。嗚呼。面目も。我放埒中。しつれ。十字兵衛。あつた。今自殺して。死路を。罪とおへ。へ。居らば。き我。今自殺して。死路を。主従とり。死か。三途より。又の世に。汝が。臣と。生ま。此恩と報べし。と。ひて。書置よ。百五十両の金と。し。あ。け。さる。も。此金。い。ふ。し。そ。の。又。石塔料。は。残。し。あ。つ。た。や。と。此不審。を。し。な。す。四辺。と。あ。つ。た。ふ。十字兵衛。が。常。又。月。を。し。な。す。刀。は。乍。俾。此。刀。に。餘。吾。郎。君。一。記念。は。是。上。奉。る。い。は。し。の。し。紙。札。と。つ。け。あ。つ。た。ぬ。餘。吾。郎。と。い。ふ。と。誠。は。是。の。前。年。相。世。

次郎時行信列。當形。そ。亡。び。る。刻。之。此。十字兵衛。日月。の。人。旗。と。奪。て。我。君。判。官。は。是。上。より。抄。群。の。功。に。より。て。我。君。より。賜。り。る。朝。鳥。と。不。名。劍。よ。て。陪。臣。の。月。又。稀。る。嘗。て。し。そ。當。時。羨。者。お。か。り。し。と。は。我。其。時。幼。年。よ。て。及。ば。夢。の。一。昔。幸。哉。我。今。此。刀。よ。て。切。腹。せ。ば。主。君。の。お。ん。手。打。よ。す。同。然。よ。て。聊。罪。と。賞。し。よ。し。よ。し。と。心。と。成。し。一。兩。肌。と。押。脱。て。彼。刀。と。放。放。し。よ。し。よ。し。此。真。の。刀。よ。り。竹。よ。て。奪。り。よ。し。刀。よ。て。十字兵衛。が。自。筆。の。文字。あり。と。し。と。讀。よ。

拙者此度の切腹は死なねばならぬ  
伊經氣流は情にたれて下りぬ

と。死。つ。け。り。扱。ひ。此。刀。の。月。と。賣。て。百。五。十。兩。の。金。と。し。よ。し。れ。ら。よ。疑。し。此。竹。刀。の。死。つ。け。と。い。ふ。の。し。ま。を。深。く。我。月。の。ゆ。え。と。い。ふ。ら。よ。し。り。ぬ。

心底の五分さよとのひて又死骸よりつき位多のいふ多のひて  
 活て居られどとひららち。再我差料の刀と抜てかどく腹より  
 さんくさる打し。ヤレやまらあかと声とけて次の間よりさる  
 餘吾郎が手を取つてさるるの庄司が僕路平とつひくいなり。君  
 より花脚を来し者なり。餘吾郎の手とさる。後何用を上京せ  
 せとさる。路平の手とつき頭とさげ茶のひたす。拙者の昨日京裏は  
 おん母君連夜おん夢見のきゆ多君の傍中と殊の外気づかひひて  
 拙者よ余ぞれ。涉安否とひききん為花脚を参りひらり。君只今  
 涉自殺せられし。十字兵衛の死より彼の短氣とさめ。大死  
 よりさる。様よ。其竹刀又書残せし。此よりゆつた。彼が忠記と初ん  
 憐れひら。おん月と全うわせたされ。了時節より何とく十字

おれよりうらて相果し。汚名とさる。死南方の家と恙なく相續仕  
 様よ。よくく。涉賢慮とさる。きれく。昨夜十字兵衛密に  
 拙者と近づけてし。其方上京せし。幸あれ。おれ供の若  
 黨奴僕おれとれ。口さかかれを我心腹とあり。其方の  
 新森おれと見処おれを我よりと一通その置あり。我自  
 殺の後餘吾郎君より面自らなどおがりゆて。卒尔乃おん  
 ろるまひもあはれ。我よりうら此理とさる。えわけし。おれと  
 つひく。子細と今十字兵衛とありうらて。具よとさる。えわけ  
 らべられ。十字兵衛が違よ。かきさる。おがしめされて。一通りおん  
 ら。おん自殺とせん。さる。おれ。十字兵衛を捕まらしめん。  
 我餘吾郎君五条坂へおん通ひ。おれとさる。おれ。先よ

紀の國へ去べしとある命はあつた。いまだ若年のおん方と手放して遊所おられた都の地は長く逗留させまうせし。我一生の誤り今悔ふもせんまじ。我已よる野山は逗留しと相待せし。急脚登山あつた。こゝろもやまは滞滞と氣づりく。急脚て一昨日京裏へ。若黨奴僕等よはを五茶坂は連留し。おん飯をさたす。くろくを常住金石塔料ともよ。藏らんとおんつら捨の根子おれた。こゝろもさる。我おん側よつた。居る。いふふも諫言とせし。おけと。さある。不行跡いさせ。まじ。死よ。と。あ。より残念と。おれ。と。いふ。と。おれ。の。煩。あ。ぞ。昨日石工来し。おん石塔。成。就。せ。し。代。金。と。ま。り。し。受。と。く。ゆ。り。の。旅。中。お。れ。を。金。と。そ。の。又。償。へ。さ。手。限。り。し。や。

おん國元より少しおられた。おん行跡いさ。畢竟領國の色。よ心と乱れ。おひての。尋常の諫言。所本心か。おん。あ。ま。ま。と。思。案。と。き。あ。れ。る。我。一。命。と。し。お。け。な。り。て。おん。諫。ま。う。ら。る。又。朝。鳥。の。刀。へ。お。れ。し。う。ん。ぞ。物。を。れ。ど。時。の。用。は。是。非。を。た。れ。を。と。賣。代。り。て。金。子。百。五。十。兩。を。又。お。さ。ぬ。これと百兩石塔の價。つら。れ。積。る。金。と。石。塔。と。高。野。山。へ。の。と。あ。ひ。せ。り。て。父。君。の。涉。願。望。乃。お。れ。と。遂。ら。ま。一。日。と。く。や。く。鎌。倉。よ。おん。飯。を。あり。て。我。書。置。と。り。て。おん。お。の。墨。と。晴。れ。心。く。我。切。腹。と。おん。悔。と。あ。れ。や。ら。し。ま。し。上。べ。し。父。君。の。おん。お。の。よ。と。餘。吾。郎。君。の。守。り。ふ。つ。ま。み。來。る。我。を。れ。ん。い。づ。と。乃。切。腹。せ。れ。し。ま。し。分。ら。ず。し。お。れ。死。る。る。は。おん。お。の。り。

其罪を引うけて死にけり。己は覺悟とさるるは是れ父君と  
あはむふ似れども其罪は冥途よりせん侘とさるるは是れ父君と  
比度の故侘無慙と後悔あはむるは此後阿曾比ぶるは  
勿論とてあきせん行跡とさるるは慎とあやりに我より  
よしきとえあげたれよとつゝ孫。鬼角君のおんすの昔は仕  
國は疎や妻子や孫のゆゑも心はかた。あやりのゆゑも  
て氣はくしくちひりんが夫等のゆゑ一言もつゝ孫は心  
のうらみ  
涉推量あはむるは此れは。まじり厚き十字兵衛が忠心の今  
自殺せしむる水の池と相成り此処より。今別後  
るるは。物語りて悲歎の流せぬは。餘り  
これとて益歎き不迫。十字兵衛

つゝ孫。此竹刀の各置し。死ぬも死すも義理  
されたる生害へ。さるるは。夫やても十字兵衛は常住金  
とつられ石塔をり高野山は建より。用へるは  
ごん理。我は。身と隠し。あて朝鳥の刀と買ひ。て  
十字兵衛が家名と立る便と。汝は十字兵衛が此各置と携  
て。飯。我は。京都市より直は行方なれ。り  
と。父母は告て。れよと。十字兵衛は。病死乃  
休。鳥辺野は葬かの金と用ひて石工は。償ひ石塔は  
書簡と。えて高野山は送まつ。比度召連する若黨奴僕  
等。此。直は暇と。路平一人と鎌倉は飯ら。旅宿と  
あけ。十字兵衛は忠義の魂と。此竹刀は我一生の守は

一とて。餘吾郎これと腰に帶て此処と立退落外の某田村  
 とりし処の小家と借昨日は多浪の憂身とあり。手はくし  
 煮焼の業とやして。あそく月日とおかりなり。○かくて路平は漁翁  
 飯の主人庄司夫婦の面前は出て十字兵衛が唇置をつてし。  
 かつくといひて。告げりたる小庄司夫婦へこれとて。十字兵衛が忠死  
 したる。彼日來の老實は似て不忠のつら。言語よよとて。これ  
 行跡ありとて怒強く頓又十字兵衛が妻子と召呼右の始末を  
 へひあせし。唇置と見せられた。十字兵衛が妻真弓これとて  
 われをて。兒子南餘兵衛と共に且驚且歎けとどと庄司の怒り  
 つたれを少の宥免も。其家財と預らば取上妻子と啞方  
 又せりたる。十字兵衛が妻真弓とよひて。夫は年四の五つまでして

半白の老女あり。兒子南餘兵衛といふ。前年妻とてしる窓太郎  
 といひて。今年五歳の男子あり。つて餘兵衛窓太郎と背おひ母乃  
 手とひて年ひく住馴る鎌倉と立退涙は袖もかゝる。あはれ  
 しのむ木陰も雨漏るあり。立退き所ふかたれを真弓はあや  
 しく歎き夫十字兵衛といふ日來の憂氣質をいさくと邪とて  
 心を持は行ひの正一人あり。今更年とも耻じ。阿曾比ぶひは  
 主人の金とつひ捨たひ。妻子の前も耻ぢらばや。本心よ  
 あるは物又狂ひや。自殺しあふも。汚名は世上に隠れ  
 る。彼が類は武士の風上にも置きたる者か。死後をも辱められ  
 ぬ。あはれ心つきあらばや。家名と汚もの。子や孫も不忠者  
 の子共等と一生人指さる。忌嫌はんと不便となおや。

怖りの十字をまきよの。ほろけ夫やと。涙よむせのりうきで死主人の  
罪と非にふきて。忠義のしるふ死せしは。夢もあしぬぞ哀きなる。  
餘兵衛も歎き入るるれども。あはきりきり秘を母とあはくさるる。  
つひ小鎌倉と出去ぬ。叔僕洛平いさる。所存やありん。直又眼を願  
て行方忘れざりふり。

⑧ 我雪とおもては軽し。身受の千金

餘吾郎旅宿よりむらゝ来て。飯しり後は。吾妻が許し音信を  
せしれ心。吾妻いしく氣づく。くまの文くき人と雇て旅宿より。  
音信と聞ふに。使飯してしるへ。餘吾郎ぬし旅宿と明し。  
國小も飯するらん。いづらん行方忘れし。しるしとてしる。  
吾妻いこれと聞し。胸つぎ。現もあはきり。

さてハおなく黄金と費し。ゆめあまきりあひし。やきりし。と  
打あし。語り。多し。怖し。れと。或ハ恨。或ハ悲。かのも咽。し。  
夜も神れ。れど。月日と。さ。ん。き。こ。ら。も。か。れ。と。い。ふ。い。と。入。る。露。の。余。  
強面消し。失を焦。物とあふの。きり。り。て。日。と。お。ろ。ろ。の。難。尼。賀。  
堂左邊門富士屋。来り。て。吾妻が。舟の代金。の。ひ。れ。を。い。ま。く。受。  
ま。し。と。り。ふ。ぞ。富士屋の。わ。り。吾妻。を。び。て。さ。く。と。り。久。世。堂。な。ん。  
りの。方。へ。け。い。ひ。よ。は。吾妻。い。し。ん。ご。せ。だ。只。泣。て。う。け。が。さ。れ。た。わ。ん。  
いと。り。さ。り。花車。の。女。よ。り。る。吾妻。着。受。の。ゆ。と。う。け。が。ぬ。ハ。我。ま。り。乃。  
い。り。り。り。彼。の。怨。は。背。と。捨。お。て。外。く。の。阿。曾。比。等。の。あ。き。癪。  
つ。ま。て。我。活。業。の。大。有。妨。と。し。れ。心。打。呵。て。う。け。が。せ。よ。し。の。は。  
花車。の。女。こ。も。え。い。し。の。か。く。吾妻。も。む。む。或。へ。や。り。理。と。説。き。か。ん。

或強くつひらかせし。餘吾郎きでへ夫よせまうとて心よ誓ひ  
 とれん。いふふいひてもうけひん。花車の女もわはしてやうくとめじよ  
 告るよ。わりの大又怒りいせさば辛目見ん人として。吾妻とて  
 上着の末よあをさぶ肌美一つかして去どれ帯を高く小手に  
 かくして打擲をれん。吾妻の声うれまも泣きか庭よりあて  
 遙に隔され假山のやりの松の木は驚おれぬ。わりの名妓とかく  
 修す。あつふも。利よめ。食る烟花のむらさる人心きり。此夜  
 堂左邊門此の楼上ふ舞妓歌妓よあまうて酒醜。笑とよ  
 めた席上やとりもちて奥へ。これへ堂左邊門吾妻よ辛  
 目とて。此方のよのけり。心かたへ。これとて  
 趣とて。愚とて。吾妻よ嫌われも宜る。此時を已

これ霜月と。寒氣殊は厳く。空のくまきびし風吹あれて  
 降る雪。紛揚くして柳絮のふよみく。鵝毛を散るく。  
 なるり小高く積て。一面又玉と敷く。假山泉水庭の木草  
 洲濱形。葦手形。立石。蒔石。滝落。架垣。石灯。箒のふみ。庭上  
 の好景。前栽の莊嚴。とて。か白妙は埋ま。心きり。遣水も  
 いと。薄綿の肌。一重をれん。寒氣肌よ。吾妻の松の木よ。つか  
 凍て。積ぬ。彼方の楼上。舞妓の立舞。影明障子。より。歌妓  
 の声も。けえぬ。  
 けい。越路の人の。月。わ。い。づ。の。人。の。花。扱。も。よ。の。沙。婆。世。界。



おりのりね白糸の昔がまーぢやかきくよ。深くとんくか  
糸のりねの物さへ

とくふも我のうとそは。いと悲く泣きまゝりて。あなれしそと  
ぐや。おりの岸まらなす。おりの方よ花咲と。おりのうき草のし  
あしぬ。悔む心ぞう。いふ妾と憎し。雪責と。あまきぞ。うきまを  
苦痛とせんより。一ぢひ又殺して。とんと死そ。泣叫と。彼方の  
楼上の騒ま。まだきて。まきまざれた。誰ひとり哀と。おの者よあ  
雪はまもしく。降まきり。吹雪は打まき。撲地倒ま。うれして。起上り。  
涙と血と相和して。涙のうき流し。氷の地獄八寒のうれし。  
忽ちと。紅蓮の衆生。異なり。髪まきれと。顔まきれと。うきま  
かきまき。黒髪も。雪積て。白髪の下。なまき。死も。氷まき。うきま

倒ま伏息も。おけよ。喚て。居まき。おの時刻も。うき。小夜も。やう  
や。更まうて。坐敷く。の人語も。やま。雪も。降まき。庭まき。の  
竹林まき。く。鳴て。り。雪散乱と。あけまき。者つと。い。て。り。  
吾妻へ。此と。ん。や。り。く。頭と。わけ。雪まき。う。よ。これと。ん。る。よ。覆面頭巾  
廣袖の衣服。手甲。股引。ま。雪まき。ま。白装束。ま。の。び。の。者。と  
ん。え。る。が。雪踏。分て。歩。来。つ。小服。ま。抱。ま。千両箱。ま。吾妻。身。受  
金と。書。ま。札。と。つ。け。る。と。彼。方。の。坐。敷。の。床。の。間。よ。ま。ま。お。き。て。  
お。と。轉。一。此。方。よ。歩。ま。来。ま。て。吾妻。の。背。後。よ。立。ま。り。氷。う。ん。刀  
と。ま。り。つ。ま。と。放。ま。れ。る。吾妻。の。驚。ま。拾。ま。り。お。退。ま。る。が。う。き  
お。し。を。か。る。呵。責。と。う。け。ん。より。死。ぬ。お。ま。り。と。あ。お。ぞ。覚。悟。を。ま。き。て  
お。と。投。つ。け。襦。ま。の。べ。て。お。殺。せ。く。と。ん。素。ま。ま。ひ。て。曲。者。の。吾妻。が

いまだぬさう松ひがのともつらと背よおひて。いふ所よりくつらつて  
玉塵と踏らう。雪烟と蹴立と。いづくともなく走去吾妻八雲の  
裏より不妻と見らう。此者又負まゆらぬ。あふ千枚箱と  
携て去のひ入人と盗て逃去。世はうぐし盗人あり。是れか  
いづれか。

雙蝶記卷之三終

